



田中千禾夫

八百屋お七牢日記

新潮社

書下ろし新潮劇場

書下ろし新潮劇場

たなか ちかお
田中千禾夫

やおや しちろうにつき
八百屋お七牢日記

昭和47年8月5日印刷／昭和47年8月10日発行

発行者■佐藤亮一／発行所■株式会社新潮社

〒162 東京都新宿区矢来町71／振替東京808

印刷■株式会社金羊社／製本■共同製本株式会社

©1972, Chikao Tanaka, Printed in Japan

落丁・乱丁本はお取替えいたします

定価 520 円

八百屋お七牢日記

四幕（附序曲と終曲）

裝幀
中山禮吉
杉浦康平

〔登場人物〕

清之助	茂兵衛の声	町廻り同心	八右エ門	藤兵衛	道伯	下男	男	侍	吾妻	おしか	おたま	おぎん	おとせ	おてつ
……	……	……	……	……	……	……	……	……	……	……	……	……	……	……
学	学	学	日雇男	日雇男	学	学	学	福祉課	女子学生	女子学生	女子学生	女子学生	日雇女	日雇女
生	生	生	……	……	生	生	……	……	……	……	……	……	……	……
	竜	辰	権	長兵衛			市	幸	おまき			女	婆	おとわ
	二	平	次				八	蔵	七			房		

序 曲

太棹の絃の遅しく賑かな前奏で幕が開くと、未だ黒幕が残って、目に入るのは上手の義太夫の床。緋毛氈と雪洞。

語り手と弾き手が袴姿で坐っているが、但し、二人共、張り物の薄い人形であつた。これは後の囚人行列の場、妙教寺の場の有様と同様。

おや、もう一つ。長い柄の先の面灯りに点火。

黒幕の裾に、矢立の筆で巻物に何やら認めている一人の老女が蹲っていた。俯向く顔の面はよく見えないが、残り少ないが白銀のように真っ白の髪の毛をうしろに垂らし、黒の元結でくくつたのが美しかったから、これが先に目に入るかもしれない。

既に語りは始まっていた。

＼花のお江戸の真ん中で、真ん中で、將軍様は広々と天下をお治め玉ふなれ。

拍子木を打つ音が聞え始めた。

＼その御家来のその家来、そのまた家来のまた家来、

物々しい鍵を手にした侍が悠々と、つづいて拍子木を叩く男が幕の前に出た。もう一つの面灯りが捉えた。

＼またまた家来のその家来、も一つ家来のまた家来、哀れ二十俵二人扶持、手当の薄いその代り、お上の御威光ひけらかし、「犯した罪のこらしめだ、神妙にさつしやりませい」……（拍子木が入り）罪人共をねめつけて威を張りながら見廻るは、活きた地獄と名も高い小伝馬町の牢屋敷。

侍、老女の前を通り過ぎ、振り返り、

侍 吾妻か。また牢日記をしたためおるな。

吾妻 (俯向いたまま) 恐れ入りまする。

侍 今日近頃の世上の噂、新しく聞き見えたこと書き続けたであろう故、

男 読んで聞かせてくれまいか。

吾妻 わたくし如き谷の者、卑しき非人の口を出る、言葉を直き直き聞かれては御耳の汚れになりましょう。

侍 殊勝なことを申し居る。谷の者とは言いながら、そなた、根っからの非人ではあるまい。

吾妻 ……わかりませぬ。

侍 なに、わからぬ。

吾妻 根からであろうと移し替えであろうと、今はもう捨てられた舵無し小舟、朽ち果てる場所は何処にても風任せ、気楽なものでござりまする。

男 あゝの谷は世の中の吹き溜りふだまりのようなところ。士農工商のそのまた下底。罪

人処刑の不浄の役は、だからこの連中の仲間を使います。

吾妻 おかげでこのわたくしも女牢の使い走り、お役に立たせていただいて露命をつなぎおります。

侍 したが婆は、そうして日記を書くほどなれば定めし以前は家柄の者であるがな。

吾妻 なにを仰せなさります。世の中にはわたくし如き者よりも、更にもっと名の高い女も数多あまたあります。上は紫式部、淀君から、下は八百屋お七にいたるまで。

侍 しからばそれを、吾妻、

男 聞かせてくれい。読んでくれい。

吾妻 はて困りましたわいなあ。

侍 気楽なものなら構わぬではないか。

吾妻 さあそれは。

侍　　いかに、

男　　どうじゃ。

吾妻　　おうそれそれ、近頃流行りの素人芝居、それでよろしければ、

侍　　なんと、

吾妻　　この牢日記、お芝居にしてお目にかけましょうか。

侍　　おう、一段と面白い。

男　　一段と面白い。

侍　　柝きを打て。

男　　おう。

太棹の絃が再び鳴り、

へさてその牢日記の初まりは、女ばかりの女部屋。女牢。

この間、拍子木を打ちながら行って仕舞う間に、お七、いえいえ、吾妻、巻物を巻い

て立ち上る。未だ丈夫そうだが流石に前屈みで、ゆっくりと真ん中に進んできた。面灯り、それを追う。

吾妻

（巻物を大事そうに撫で）過去、現在、また未来まで、いろいろのことを……書きましたなあ！

柝が入り、刻むうちに。

——暗転

第一幕

三方を土の壁、一方だけを三寸角の格子で囲った牢。女部屋と称した女牢。広さは十
五、六畳。畳の縁^へ無し。光は格子側の廊下から僅かに差す。

(但し、見物に面した格子は上手隅の出入口、三尺四方くらいの格子を除き、邪魔
だから取り払い、また装置としての壁はベニヤ板などで製作して張り廻らすと、か
さは張るし持ち運びに不便故、布幕にしたい。大事なのは重量感よりも暗い孤独感
である。これは後で別の使い道もあろう。次手^{ついで}に断わっておきたい。お七の処刑さ
れたのは天和三年——一六八三年。八二年という説もあるが牢屋敷の改良がこの年行
われた、と史実は伝える。例えば、それまでは前述のように三方壁であったのを、
風通し悪く不衛生なので四方格子にした。必ずしも史実通りに追うのではない。否、
それどころか可成り自由に脚色したい方だし、三方壁にしたのは従って何よりも、

その方が外界遮断の感が強かろうと思つたばかり)

奥の正面だけ畳三畳分高くなっているのは牢名主の席だからである。男牢ほど数多くの役、それによって占める座の順序、また「牢法」の如きが此の女牢でも行われたかどうか不詳であるが、牢名主と一番役、二番役の位くらいは残しておこう。

そこに五十をすぎた女が立て膝をして短い煙管^{きせる}で、実は禁制の煙草^{たばこ}を吸っていた。おてつ。

その左の一段低い畳に、三十をすぎたのが手枕で、寒そうに横になっている。おとせ。その右は、三十五、六の年増^{とし*}。何やらしきりに手細工の最中。塵紙に飯粒をまぜて作る数珠であつた。

連中から離れた下座に小肥りの小娘、おたま。

並んで、やせた二十五、六の女。おしか。

この二人はやや膝を崩す程度。

囚人たちの着る物は夫々^{それぞれ}に模様も色も異なるが、前住者たちが次々に着用したから売却にも耐えないほど、可成り汚れている。

髪はほぐして背に垂らし、紐で結んだ。

おてつ やいやい、いい加減かげんに起きねえか。

おとせ 頭あたまが痛い。医者いしやを呼んでおくんなさい。

おてつ ふん、血ちの道のたんびにのぼせるんじや、お前まへ、よっぽどためてるね。

おとせ おあがりなすったお方あたらには却うって羨うらやましかろう。

おてつ はは……起き上こり小法師こぼしというじゃないか。わっちだつて未だ血はあるさ。

ほれ、あすこに生きのいい新入りがおる。今夜にでも可愛かわいがつておやりなよ。

のぼせもとれるというもんだ。横でわっちも楽しもう。

おとせ どれどれ。(半身を起し)ああ、おたまか、大柄おおがらの山出やまでしだあ。

おてつ それよりこちとら腹はらが空すくく。使つかいの吾妻ごさい、おそいなあ。

おとせ おそいなあ。

おてつ まあおとなしく……しつ、廻まわりだ。

というのは、拍子木の音と共に侍と下男とが近づいたからである。

おてつは火打ち道具などを後へかくして両膝ふたひざを揃そろえた。あとの四人も同様、畏かしこまった。

侍は格子の前で留まり、中を見て、

侍 上州神崎村、無宿、おてつ、五十一歳。密淫売仲介ならびに人買い。前科八犯。

おてつ へーい。おありがとうございます。

侍 浅草雷門、五郎八女房ごろはちおとせ、三十二歳。盗品故買並に美人局つのもたせ、前科五犯。

おとせ へーい。おありがとうございます。

侍 日本橋小田原町、呉服屋喜右エ門女房、おぎん、三十五歳。姦通かんつうの上、欠かけ落おち。初犯。

おぎん へーい。おありがとうございます。

侍 相州足柄村生れ、芝神明町、炭屋下女おたま、十八歳。窃盜。初犯。

おたま へーい。おありがとうございます。

侍 神田岩本町、大家源兵衛娘おしか、二十三歳。熊太郎と結納ゆいのう相済みしところ同町巳之助に文をつける。初犯。

おしか へーい。おありがとうございます。